

我が国の学会誌の苦悩と模索

Problems in the official journals of medical association in Japan

金沢大学大学院医学系研究科
循環医学専攻経血管診療学
松 井 修

十全医学会誌への投稿が激減している。我々金沢大学卒業生にとっては寂しい限りである。和文論文は博士論文としては不適とする昨今の風潮の影響が大きいのだろう。また、いわゆる二重投稿の問題も大きく影響していると思う。以前は、全体像を詳細に十全医学会誌にまとめ、そのエキスを欧米の雑誌に英文論文として投稿する場合も多かった。私が指導した博士論文でも、十全医学会誌に掲載された後に欧米の一流誌に掲載された論文は少なくない。直接英文で的確にまとめる前に、日本語で詳細にまとめる作業を行うことは、始めて本格的な論文に挑む若い人達には大変有用な作業であった。10年ほど前から、こうした極めてローカルな雑誌でも二重投稿の対象との風潮が強くなり、十全医学会誌への投稿が困難となってきたと思う。そのころに、私が所属する日本医学放射線学会誌に掲載された論文と内容が酷似する論文が、我々の領域では最も権威のあるRadiology誌に掲載されたことがある(同一人物による)。これに対してRadiology誌に日本から告発があったが、Radiology誌の見解は、“日本語の日本でのみ読まれる雑誌だから特に二重投稿とはみなさない”ということであった。日本はアメリカ以外ではRadiology誌への投稿が最も多い国の1つである。その国のメインの学会誌ですらローカル言語でのローカルな雑誌であり、あえて二重投稿とはしない、との見解であった。この見解が現在も通用するとは思えないが、なんとなく納得したものである。しかしながら、あらゆる情報が容易に入手できる今日、こうしたことは許されないであろう。これらに加えて、研究業績がいわゆるimpact factorによって評価されるようになったことも大きな原因と考えられる。日本語の雑誌は基本的にはimpact factorの対象とはならないという理由で業績評価の対象とはされなくなってきている。そのあおりでわが国の和文学会誌も軒並み存続の危機にある。

日本医学放射線学会では従来和文誌と英文誌の両方を有していたが、投稿論文が著しく減少し一昨年より和文誌を廃止した。しかしながら、英文誌にもimpact factorがついていないために、投稿の減少傾向に歯止めがかからず、その対策を使命として突然学会誌編集委員長を託された。その対策とは、英文学会誌に“impact factorをつけること”、である。Radiology誌の査読を長年勤めてきたこと(毎年公表される)、またAmerican Journal of Roentgenology誌のInternational Editor(査読と普及が役割)を努めていることなどからの指名と思われたが、私はimpact factorというものが何であるかをよく理解していなかった。早速、編集者の指導をうけながら勉強を開始した。まず驚いたの

は、impact factorとは、アメリカのThomson Scientific社による私的な指標であるということであった。私はなんとなく“(おそらくアメリカの) 公的機関が非常に吟味された科学的手法で算出した信頼性の高い指標に違いない”と思っていたのであるが、学者の研究の便のために“それぞれの雑誌がいかに影響をもちえたかを、引用という視点から数値として算出した物”ということである。また、impact factorが、“その年の前の2年間のすべての論文の総引用数を同じ2年間に掲載された総論文数で割る”、という極めて簡単な方法で算出されていることも初めて知った次第である。この算出法からは、古い論文を最近のimpact factorでのみ評価することは不合理であること、個々の論文の影響力の指標ではないこと、などの大きな矛盾点がすぐに理解できる。こうしたものが一人歩きしているという事実には驚いたが、現実には何らかの対応をしなければ投稿が望めない。ではどうすればいいのか? 編集者からの指摘は以下のようであった。1. 引用されやすい話題でのレビューを多く掲載しそれをできるだけ1月号に掲載する、2. 論文を厳選する(リジェクト率をあげ採用論文の質を向上させると同時に総論文数を減らす)、3. 大会や年会の抄録集を本誌扱いにしない(総号数、論文数を減らす)、4. 雑誌内で引用を奨励する、などが有効な手段ということである。Impact factorの仕組みからは理解できることである。しかしながらこれらの実行は実際には容易ではない。1は最も即効性のある有効な手段と思われるが、impact factorのない雑誌になかなかボランティアで寄稿してもらうことは簡単ではない。2は学会誌としては(若手の活性化のためには) 困難な問題である。3は実行可能。4は実行可能であるが即効性はない(また最近同じ雑誌からの引用は評価しない方針とのこと)。結局、優れた論文を地道に増やすということが大事、という結論であり、託された使命の早期の達成は困難な状況である。ただ、associate editorをそれぞれの分野のいわゆるスターにお願いしたのが功を奏したのか、投稿論文数が急増しているのが唯一の光明である。ただしこれも上記の掲載論文数の増加でimpact factorには悪影響ということになるのかも知れない。

論文は英文で世界に向けて発信すること、これは今後ますます重要であろう。特に若い世代には必須である。我が国の学会誌とくに和文誌の衰退は当然でありむしろ喜ばしいことかもしれない。しかし、そのあり方や将来への模索・苦悩は今後も続く。